



夢ある未来を、共に創る。

2017 SS 事例紹介

# 勉強会を活用した組織成長モデル

## ～機能期のチームが継続的に成長するために～

2017年6月8日

SCSK株式会社

金融システム第二事業部門

金融システム第五事業本部 証券システム第一部

伊藤 修司、山口 真、豊田 圭一郎

成長が停滞し始めた機能期のプロジェクトにおける勉強会を活用した組織成長モデルの適用事例をご紹介します。

## Agenda

### 1. プロジェクトの状況

### 2. 「参加型勉強会」の目的と進め方

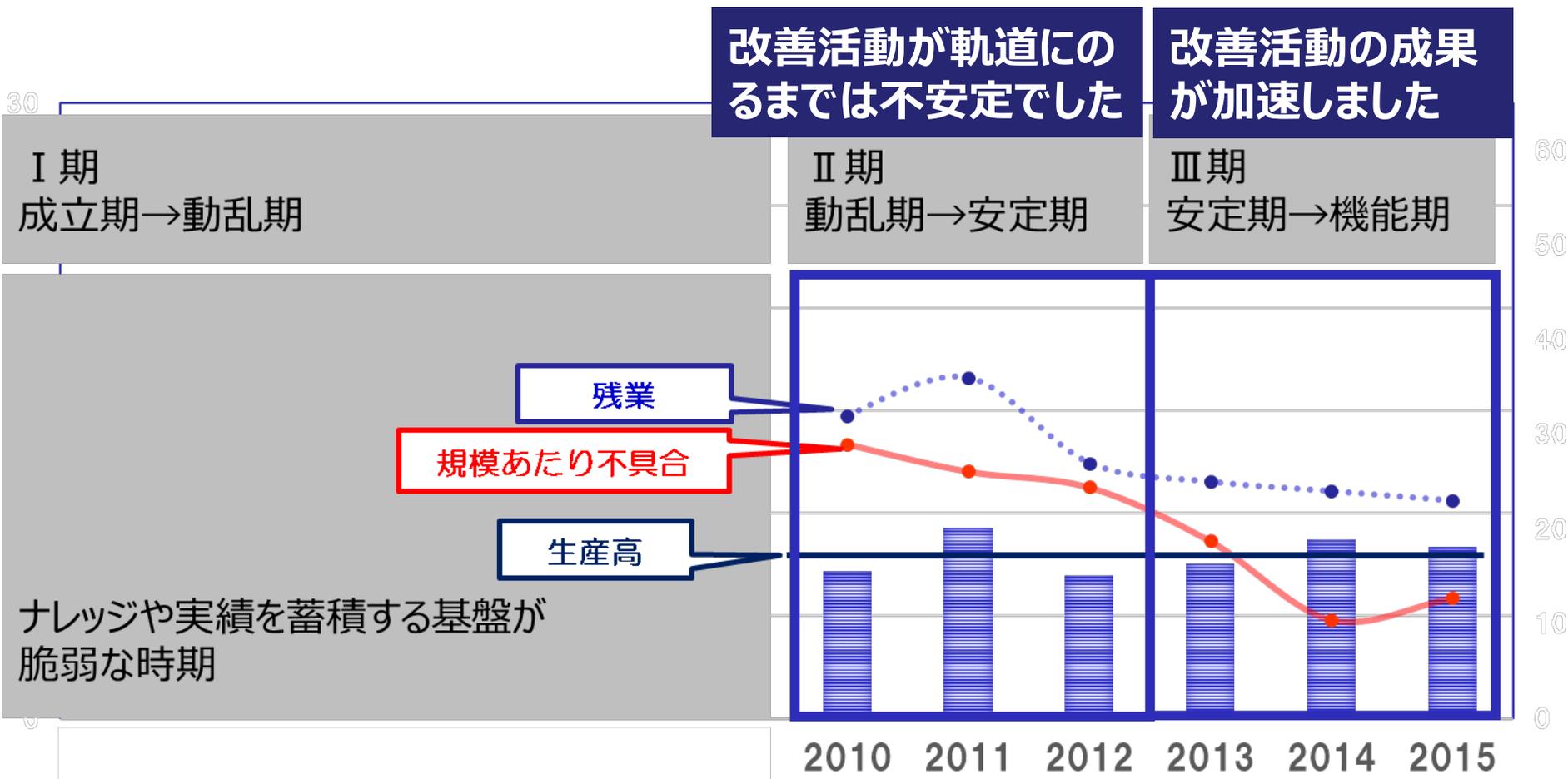
### 3. 「参加型勉強会」で工夫した点

### 4. 「参加型勉強会」の開催実績

### 5. 活動の成果と課題

# 1-1. プロジェクトの歴史

我々は、業界の成長と共に発展してきました。  
また、継続的な改善活動の成果として品質向上を実現してきました。  
⇒ **しかし、近年は今までと同じやり方で成長できるか不安です。**



# 1-2. プロジェクトの状況

成長を阻害している要因を現場の声から整理しました。  
キーワードは「**変化**」、立場によって少しずつ捉え方が違いますが、  
まだまだ成長できる「**伸びしろ**」があると感じました。



全般

## 1. 外部環境の変化

そこは当社の領域じゃないよ  
**変化**に気づかない  
それは営業のしごとだから

FinTech ? きっと関係ないよね



若手

## 2. 閉塞感・手詰まり感

自分のチームは上手くいっている、課題がみつからない  
**変化**の方法がわからない

改善を考える時間がない 大胆に変えるのはちょっと・・・



中堅

## 3. プロセスや思考が硬直化

いつも通りやっているから大丈夫です、安心して下さい  
**変化**する必要性を感じない

〇〇さんがこついったから ベストを尽くしています

# 1-3. 打開策の検討

変化に対応し、変化を起こし、自らが変化するために必要なもの・・・  
我々は一つの答えを導き出しました。

⇒「**参加型の勉強会**」の開催です。

問い

現状のメンバーで規模と収益を維持しながら、  
品質、生産性を高めていくために我々は何をするべきか？



1

まず必要なのは、現場の価値基準を取り払って、様々な  
考え方に触れ、視野を広げること  
そして、自分自身で学びを獲得すること



2

チームや個人が自律的に学び成長するためのきっかけづくり  
全員が主役の「参加型勉強会」を開催すること

# 2-1. 「参加型勉強会」の特徴①

「参加型勉強会」は、グループワーク中心、座学よりもアウトプット重視です。参加者全員が主役になれる内容での運営を意識しました。  
⇒ 共通のキーワードは、この勉強会に「**正解はありません**」です。

## 「参加型勉強会」タイムスケジュール

### 講義（30分）

- ・講師がテーマに込めた想い
- ・テーマに関連する事例内容や最新のトレンド情報を共有

### グループワーク（60分）

- 4～5グループに分かれてワークを実施
- ・ワークに正解はない、発表は持ち回り制
- ・結果レポートを共有

## 「参加型勉強会」の理念とゴール

### 【理念】

- ・自分で考え自分の意見を持つこと
- ・対話を通して気づきや変化を起こし、参加者同士が「協働できる」状況を作る

### 【ゴール】

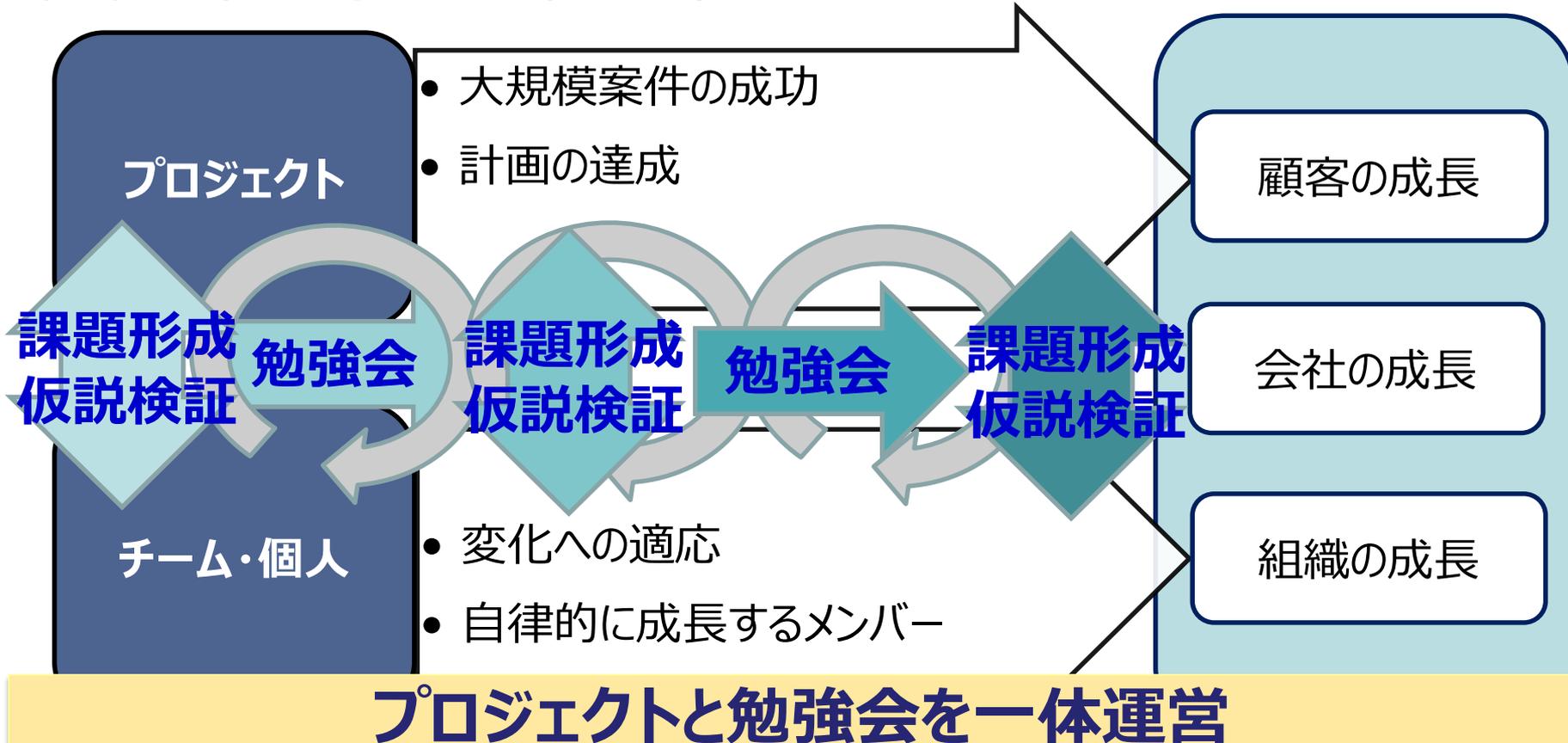
- ・自分の意見を自分の言葉で表現できるようになる
- ・参加者全員が深い気づきや発想の転換の機会を得て、実際に行動する

**参加者全員が主役となる場を演出**

## 2-2. 「参加型勉強会」の特徴②

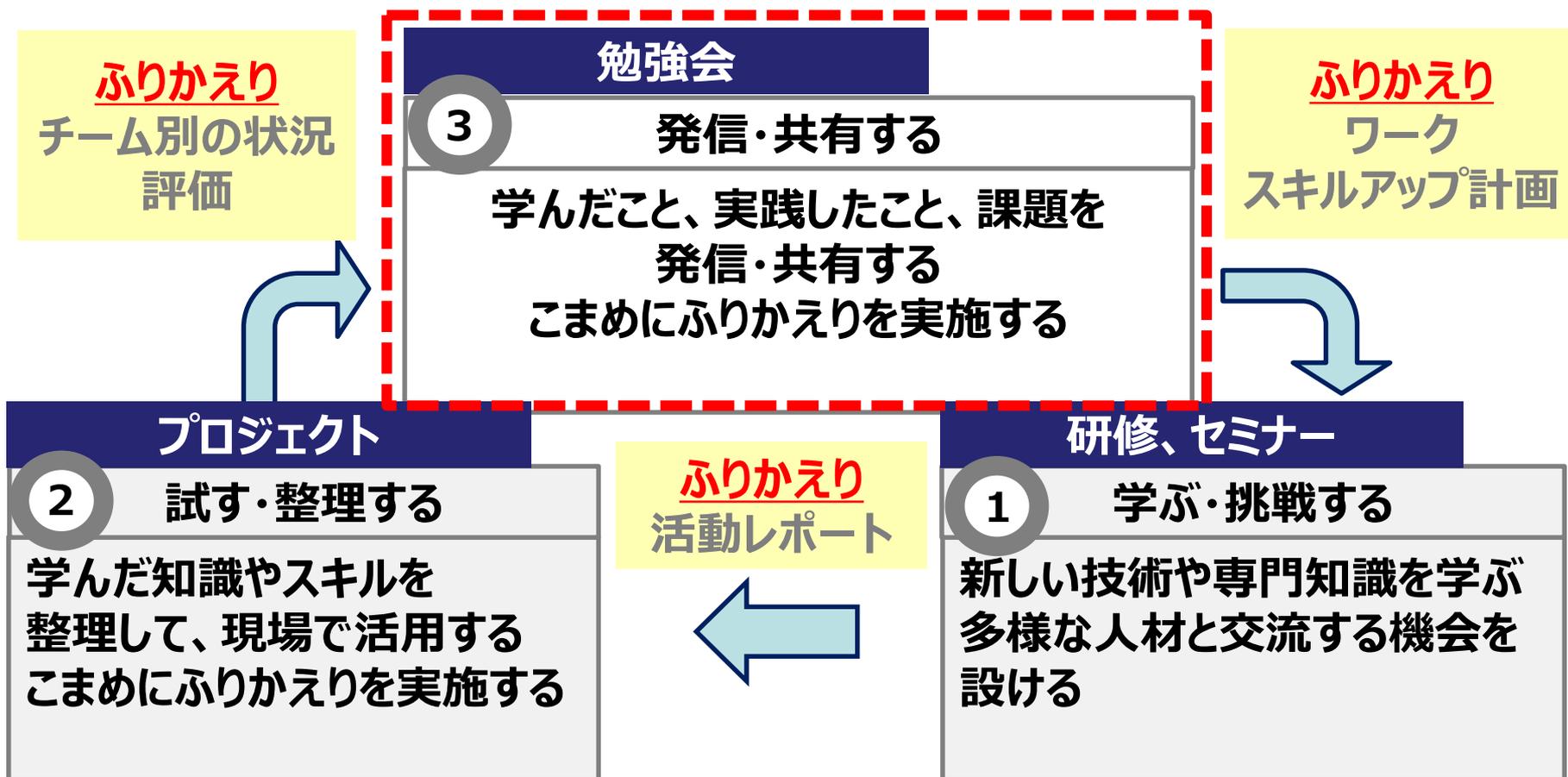
従来、運営していた「勉強会」は、個人のスキルアップを目的としたプログラムが中心でした。

今回は、「プロジェクト」と「勉強会」を一体運営することで相乗効果を発揮できる状況を作り出しました。



## 2-3. 「参加型勉強会」の特徴③

ふりかえりを活用して、「研修、セミナー受講」、「プロジェクト」と「勉強会」が連動しやすいように設計しました。



**学びと成長のPDCAを無意識のうちに実行**

# 3-1. 工夫した点

この活動を実施する際に、工夫した点は3つあります。

## 工夫1

### こまめにふりかえり

勉強会後やプロジェクトの節目に、KPTでふりかえりを実施しました。書くことで頭の中を整理、記録に残すことで各自の考え方の変化を可視化。回を重ねるごとに学びの意識の高まりや前向きな意見が増えてきました。

## 工夫2

### 記録と情報共有

毎回、報告レポートを作成して、参加できなかったメンバーにも内容が伝わるように情報を共有しました。また、部門内の情報発信サイトに開催要領と報告レポートをアップして、時間が経過しても情報がすぐに引き出せるようにしました。

## 工夫3

### ランチ開催

多様な参加者を募るためランチ形式での開催を優先しました。業務後は参加が厳しいメンバーも参加しやすくなりました。きっかけはお弁当でも、参加してよかった、また参加しようと思ってもらえることが重要と考えました。

# 3-2. 工夫した点 ①こまめにふりかえり

例えば、勉強会後のアンケートとして、KPTでふりかえりを実施しました。また、その結果を一覧化して共有しました。

テーマ： 競合機社に勝つために… 自分たちの強み弱みを分析してみよう		記入日：2016/11/30 氏名：XX XX
<p><b>・Keep</b> (この会に参加して良かったこと、実際に現場に取り入れてみたいと思ったこと)</p> <p>あるグループでは強みとして営業が強いグループでは弱みとして挙げられていた。着眼点は同じでも、捉え方は様々あるというのがわかった。講師のプレゼンがよかったです。楽しみやすさとユーモアがわかりやすくて、受け易かったです。</p>	<p><b>・Try</b> (次への課題、今後に活かしたいこと)</p> <p>ローテーション スペシャルist育成 各プロジェクト内で試行してみたい</p>	
<p><b>・Problem</b> (この会に参加して気が付いたプロジェクト、チーム、個人の課題点)</p> <p>各自がそれぞれなんとなかよよと考えているが、実際に行動に移しているのはごく一部で、その行動や思いも同質とは共有できていない。</p>	<p><b>・自由記入欄</b> (遠慮なく、お弁当等率直な意見をお願いします)</p> <p>グループワークで意見が出た場合、次のワークではメンバーを入れ替える課題を検討して欲しい。</p>	
テーマ： 競合機社に勝つために… 自分たちの強み弱みを分析してみよう		記入日：2016/11/30 氏名：XX XX
<p><b>・Keep</b> (この会に参加して良かったこと、実際に現場に取り入れてみたいと思ったこと)</p> <p>●初めに入りたいこと -スペシャルist育成 -他のシステム、アカウントの交流 ●良かったこと -アカウントの使い</p>	<p><b>・Try</b> (次への課題、今後に活かしたいこと)</p> <p>●初級講習 -知識の習得や各自の得意な方向性トップアカウントはどのくらいアプデできる。(課題の共有) -個人と会社の経理を一貫させる経費 -スペシャルist育成計画 -研修は頻度で専門的にestrictoripoi</p>	
<p><b>・Problem</b> (この会に参加して気が付いたプロジェクト、チーム、個人の課題点)</p> <p>●この会の課題点 -研修はもっと詳しく計画に書きたい -資料の整理には研修がわかるかなど ●初級の課題点 -個人化</p>	<p><b>・自由記入欄</b> (遠慮なく、お弁当等率直な意見をお願いします)</p> <p>この会が熱かったのが良かったんですがグループワークが時間が短く感じられたので、</p>	

<p>●Keep(この会に参加して良かったこと、実際に現場に取り入れてみたいと思ったこと)</p> <p>ドライブルームが気に入りました。おしゃべりされた方のセンスに感服です。この勉強会です。 インベーションを覚えるのは容易ではないですが、自分からちょっと考えたい事があり、質問を聞きたいように感じました。</p>	<p>●Problem(この会に参加して気が付いたプロジェクト、チーム、個人の課題点)</p> <p>チーム分けが、終わるころがありすぎる。積極的に参加するならば、質問がない相手と同期になる危険性が必要だと思います。</p>
<p>誰から何を学び出すのは又おこしかできない事、しかし、有と無の足し算で計算し、準備を入れ替えてみる？別のモノと置き換える？やら凡人にもできる。</p>	<p>今回は、意識して第一声を挙げてみました。zoom outに関しては聞いてイマイチです。</p>
<p>ブロックチェーンの概要が少しでも理解できた。</p>	<p>自身の強みが、新たな情報を取り入れる事も必要だが、様々な意見を聞いて柔軟な発想をすることが必要だと思った。</p>
<p>最近な予備知識にして、そういうものだからではなく、こう変えたいという思いを持つことで、新たな仕組みが生まれるのだ、というのを感じられた。</p>	<p>各チームから色々なアイデアが発表されたが、そこに於いて、実際の有無、どのように実現するかなど、さらなる議論をする場が欲しい。</p>
<p>各グループで特長紹介、発表者のローテーション、進捗の工夫が随分あったので参考になった。 物事を抽象化して考えることは、仕様を決めたり、レビューをしたり、課題を捉えたり、解決案を考える時に有効そうだった。</p>	<p>それぞれチームの特性が各自も意識している課題の種類によって発想の方向性が少しずつ違う。実際の業務でもっといろいろなチームのメンバーで議論したらよりよい意見が見つかりそうだと感じた。</p>

**ふりかえりが次のプロジェクトや勉強会につながる**

## 3-2. 工夫した点 ②報告レポートで共有

毎回、報告レポートを作成して勉強会に参加できなかったメンバーが開催内容を参照できるように工夫しました。



**参加者の想いや考えを組織の資産として記録する**

### 3-3. 工夫した点 ③ランチ開催

ランチ開催とすることで、業務後は参加が厳しいメンバーも積極的に参加できるように工夫しました。



**普段は参加できないメンバーも積極的に参加**

# 4-1. 活動実績

変更  
スライド

夢ある未来を、共に創る。

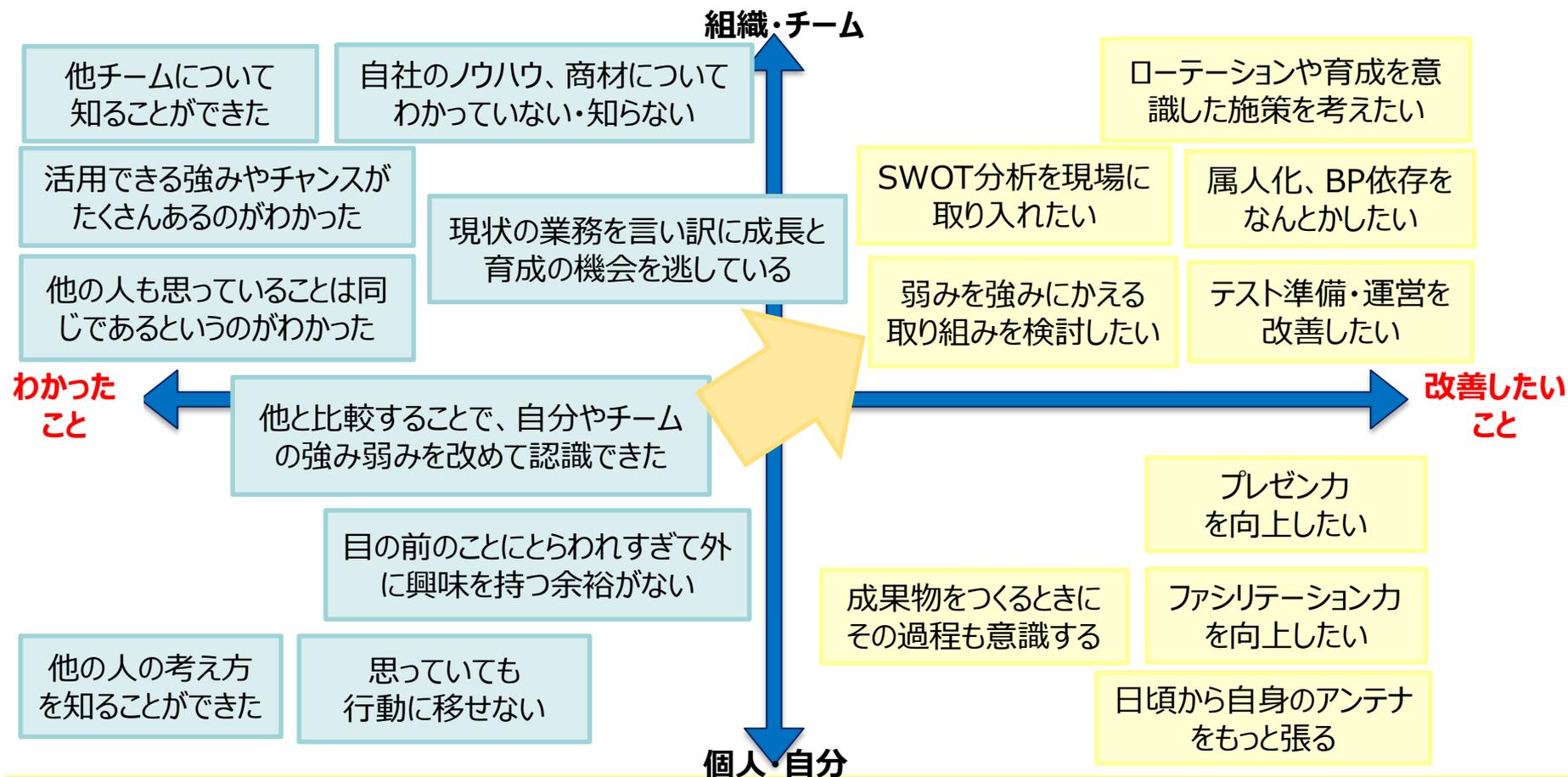
## 2016年度の活動実績と参加者数

回	日時	テーマ	キーワード	参加者
1	2016/6/29(水) 12:00～13:30	What's our value and goal? 勉強会を通じて目指すゴールを考えてみ よう！	Value and Goal	32名
	2016/7/1(金) 18:00～19:30			
2	2016/11/30(水) 11:30～13:00	競合他社に勝つために…自分たちの強み 弱みを分析してみよう	SWOT分析	37名
	2016/12/26(水) 11:30～13:00			
3	2016/12/7(水) 11:30～13:00	AI（人工知能）勉強会 ～AIのプロに 聞く！～	AI	34名
4	2017/2/28(火) 11:30～13:00	ブロックチェーンにならえ！我々の今をより 良く、未来を明るくする イノベーションをひ たすら模索してみよう！	ブロックチェーン	30名
5	2017/3/15(水) 10:00～11:30	投信業務・システムの全体像を学び、販 売会社システムの役割を整理しよう！	投資信託	28名

**5つのテーマで7回開催、延べ160名参加（参加率 約6割）**

# 4-2. 参加者の声

回数を重ねるごとに、勉強会のふりかえり結果が「わかった」から「改善したい」に変化しました。



**回数を重ねるごとに発言や考え方に変化が生まれた！**

# 4-3. プロジェクトの状況

その結果、現場ではこんな声をよく聞くようになりました。



## 1. 外部環境の変化

当社がその領域に食い込むにはどうすればいいか？

他部門と連携して動く

ブロックチェーンを現場で試そう！



## 2. 手詰まり感

イノベーション、発想こそ源泉、我々はまだまだ「伸びしろ」がある

Agileを部分的に試行

他チームの意見と良い所を取り入れて



## 3. プロセスや思考が硬直化

プロジェクト内でノウハウやリソースを共有してもっとうまく回そう

全体最適化の観点

負荷分散しよう

**できない理由探しからどうすればできるかに変化！**

# 5-1. この活動の成果まとめ

この活動で得た成果をまとめます。

## ① 多様なメンバーが参加し、議論することの効果

普段は固定メンバーの勉強会や会議、普段は積極的に参加しないメンバーの考え方や発言に新たな可能性がみえる

→ 現場におけるメンバーに対する印象も変わる

## ② 現場のコミュニケーションが活性化

勉強会の中でチームの強み弱みや実例を共有することで、実際の業務でチームの枠組みを超えた会話や連携が増えた

→ チーム横断でノウハウやリソースを共有する第一歩へ

## ③ 積極的な発言を引き出す

全体会議でコンフリクトを恐れない積極的な発言が増えた

→ 発言者の顔ぶれも以前よりも多様になった

## ④ 新しい知識やスキルへの意欲

旬のテーマや普段使わない手法を体験することで、外に目が向くようになってきた

→ 一部のメンバーは、外部研修やセミナーに自ら参加

## 5-2. 今後の課題

今回の活動を経て、更なる成長を継続するために課題と考えているのは以下3つです。

### ①全体とチームで中長期ビジョンと戦略の向き先を合わせる

機能期の組織は、全体とチーム・個人の向かう先があっていないと、継続的に成長していくのは困難である

→ チームのビジョンと戦略を作成して全体で方向性を合わせる活動を実施中

### ②プロジェクト内で柔軟な配置転換と育成

同一のメンバーで成長を継続するためには、プロジェクト内でのローテーションとそれに耐える要員の育成が必要である

→ プロジェクトの中長期的な成長戦略として検討中

### ③プラス効果の可視化

今回、積極的な発言が増えた、コミュニケーションが活性化した、改善しようとする取組みが増えた等のプラスの効果があったが、個人の印象や見解によるところが大きく、効果を可視化できているわけではない。

→ プロジェクトの中長期的な改善施策として検討中



夢ある未来を、共に創る。

グローバルITサービスカンパニー — SCSK

最後まで発表をお聞き頂きありがとうございました。

- 本書の著作権はSCSK株式会社に帰属します。無断転写および本書に記述されたアイデア等の無断流用を禁止します。
- 掲載されている社名や製品名は、それぞれ各社の商標または登録商標です。